

## 新たな学びの視点に係る調査研究

＜新しい時代に求められる資質・能力を育むための、  
「目標、内容、指導、評価」の一体化＞【中間報告】  
埼玉県立総合教育センター教育課程担当



埼玉県のマスコット「コバトン」

キーワード：「資質・能力の育成プログラム」，「思考力、判断力、表現力等」，「パフォーマンス評価」，  
「ルーブリック」，「モデレーション」，「フィードバック」，「省察、見直し・改善」

## 1 はじめに

本調査研究は、新学習指導要領で明示された資質・能力の育成に向けた取組である。本年度の要旨は以下3点である。

- (1) 見えにくい学力、測りにくい学力と呼ばれていた「思考力、判断力、表現力等」の育成を目指し、それらを可視化するためのパフォーマンス課題や測定するためのルーブリック等の評価方法を具体的に提示すること。
- (2) 単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、児童生徒の資質・能力（特に「思考力、判断力、表現力等」）の育成を目指し、「目標、内容、指導、評価」を一体化させたプログラム（以下「育成プログラム」）を設計し、実施すること。
- (3) 「育成プログラム」全体を省察し、目標、内容、指導、評価、それぞれに対し、フィードバックを行い、見直し・改善のサイクルを回すこと。

また、本調査研究は「何ができるようになるか」という目標と、「何が身に付いたか」という評価についてより焦点を当てているが、「何を学ぶか」という学習・指導内容や、「どのように学ぶか」という学習・指導方法についても研究の対象としている。

## 2 研究の目的

- (1) 新しい時代に求められる児童生徒の資質・能力の育成に資すること。
- (2) 本センターが責任を担う「教職員の学びの拠点」としての研究と実践を行うことで、研究協力委員の指導力向上に資するとともに、学校現場が直面している課題の解決の一助となること。
- (3) 本調査研究で得られた成果や知見を、県内のみならず全国へと発信することで、教育改革の一助を担うこと。

### 3 研究の目標

- (1) 各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせ、児童生徒の資質・能力（特に「思考力、判断力、表現力等」）の育成を目指す。
- (2) 単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、児童生徒の資質・能力（特に「思考力、判断力、表現力等」）の育成を目指し、それらを測定する評価方法（パフォーマンス評価等）を開発する。
- (3) 資質・能力（特に「思考力、判断力、表現力等」）の育成に向けて「目標、内容、指導、評価」を一体化させ、それらを踏まえた不断の授業改善につなげる。

### 4 研究の方法

対象教科等は（1）及び（2）、研究協力委員は、小学校2名、中学校2名、高等学校3名とする。各教科等の調査研究協力委員会（年5回予定）で、研究内容についての確認や作業分担、協議、進捗状況の確認、検証授業等を通して研究を進める。

- (1) 小中学校：国語、社会、算数・数学、理科、音楽、図画工作・美術、技術・家庭、  
外国語活動・外国語、体育・保健体育、特別の教科 道徳
- (2) 高等学校：国語、地理歴史・公民、数学、理科、家庭、外国語、保健体育

### 5 研究の概要

2年の調査研究とする。

1年目（今年度）は、児童生徒の資質・能力のうち特に「思考力、判断力、表現力等」の育成を目指し、「育成プログラム」を設計し、実践を行う。その後、それらを踏まえた省察により、見直し・改善を施した新たな「育成プログラム」の設計と実践につなげる。

2年目（次年度）は、1年目を踏まえ、資質・能力の3つの柱（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）をバランスよくふくらませながら、児童生徒がより一層成長していけるような「育成プログラム」を設計し実践を行い、それらを踏まえた省察により、見直し・改善を施した新たな「育成プログラム」の設計と実践につなげていく。

### 6 成果と課題

#### (1) 成果

ア 児童生徒の資質・能力の育成に向けた「目標、内容、指導、評価」を一体化したプログラムを設計し、実施、省察、見直し・改善のサイクルを回す

- ・ 小中学校道徳部会では、小学校及び中学校の研究協力校で「育成プログラム」を設計し、実施した。設定した目標に対しては、児童・生徒の姿のよりよい成長の様子が見られたが、1単位時間における授業内での発言や話合いの様子、記述などから行った評価では、学習内容及び指導方法の見直し・改善が必要という分析結果となり、次の実践に向けた改善と修正に努めている。

- ・ 高等学校数学部会では、研究協力員3名がそれぞれの所属校において、計4つの「育成プログラム」を設計し、実施した。単元や題材など内容や時間のまとまりを見通してパフォーマンス課題を設定し、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価（採点）を実施した。採点においては、4名でモデレーションを実施し、ルーブリックの改善と修正を行いながら評価の信頼性と妥当性を高めた。評価実施後、評価結果の分析を元に「育成プログラム」全体を省察し、目標、内容、指導、評価についてそれぞれフィードバックをしながら、「育成プログラム」の見直し・改善を行った。新たな「育成プログラム」設計に向けた多数のアイデアを見出すとともに、本調査研究を学校現場に広めていくことを計画している。

#### イ パフォーマンス課題やルーブリックを作成し、資質・能力（特に「思考力、判断力、表現力等」）を測る評価（パフォーマンス評価）を実施

- ・ 小中学校国語部会では、小学校2校、中学校2校でパフォーマンス課題を実施した。これらの課題により、学習のねらいの焦点化が図れ、個々の児童生徒の思考過程や技能を細やかに把握することができた。また、各パフォーマンス課題について、ルーブリックによる評価を行った。各研究協力員が実践事例に沿って作成したルーブリックは、評価基準の設定に課題がみられたため、これらを次年度に引き継ぎ、検討することとした。
- ・ 小中学校算数・数学部会では、小学校2校、中学校1校でパフォーマンス課題を実施し、ルーブリックによって評価を行った。小学校では目標とする資質・能力を測るパフォーマンス評価が行われたが、中学校ではパフォーマンス課題の問い方によって、目標とする資質・能力を生徒の解答から測ることが困難であった。今年度の改善点として見直しを行うとともに、次年度への重要な課題として捉え、研究を進めていく。
- ・ 小中学校外国語活動・外国語部会では、中学校で行ったパフォーマンス評価について、部会内で再評価を実施し、パフォーマンス課題とルーブリックの見直しを行った。
- ・ 小中学校音楽部会では、歌唱、器楽、創作（音楽づくり）、鑑賞のそれぞれについて汎用性のあるルーブリックを計4つ作成した。また、中学校での定期テストでの個人の到達度を測るためのパフォーマンス課題についても検討し、実施した。
- ・ 小中学校体育・保健体育部会と高等学校保健体育部会では、小中高の発達段階を踏まえながら、学習カードの記録・記述から児童生徒の思考力、判断力、表現力等を測るルーブリックを作成した。
- ・ 高等学校国語部会では、3人の研究協力員がそれぞれ「書くこと」についてのパフォーマンス課題を作成し、各校で実施し、ルーブリックによって評価を行った。そのうちの1校では、パフォーマンス課題の実施前にルーブリックを提示し、課題への取組の指標とさせた。その結果、ほとんどの生徒が標準以上の評価を得た。
- ・ 高等学校理科部会では、授業アンケートの中に自由記述のパフォーマンス課題を組み込み、ルーブリックによって採点を行った。
- ・ 高等学校外国語部会では、3校で共通して「話す」資質・能力についてのパフォーマンステスト（スピーキングテスト）を実施し、ルーブリックによる相互評価及び自己評価を行った。各校実施したパフォーマンス評価については、部会内で活発な議論を行い、それぞれにフィードバックした。次年度に向けた共通の課題等についても共有し、新たなパフォーマンス評価を計画している。

#### ウ パフォーマンス課題を活用し、「主体的・対話的で深い学び」を実現

- ・ 中学校技術・家庭部会では、「生活の営みに係る見方・考え方」や「技術の見方・考え方」を働かせて解決する現実的で真実味のあるパフォーマンス課題の開発と、題材の学習過程全体を見通したパフォーマンス課題の活用と位置づけを検討し、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した。パフォーマンス課題の提示や試行により、生徒自身が学習内容と生活や社会を関連付けながら思考する必然性を実感し、学びに向かう原動力が育まれた。

その結果、その後の問題解決の学習場面で資質・能力を統合的に発揮し、前述のパフォーマンス課題を解決したり、その質を高めたりする生徒が多く見られた。研究成果の見直しを図り、分野ごとの「見方・考え方」や学習過程に応じたパフォーマンス課題の内容の見直しや新たな位置付けの検討等を行った。

#### エ 新学習指導要領の科目の単元構成案、指導計画案及び評価方法を開発

- ・ 高等学校地理歴史・公民部会では、新学習指導要領における新科目「歴史総合」の単元構成案、指導計画案及びその評価方法について検討し、3つの事例を提案することができた。3名の研究協力員が生徒の実態を踏まえ、指導計画と評価計画を作成した。新科目の指導計画・評価計画であるため、平素の授業での実践を行うことはできなかったが、授業外の補習等の時間を用い、計画の一部を試行授業として行った。そこで得た知見を用いて研究の見直し・改善を行っている。

#### オ 本調査研究で得られた成果や知見を、県内のみならず全国へと発信

- ・ 本調査研究の本年度の成果や知見について、中間報告として本センターHPにて公開するとともに、教育関連の出版社等数社へ本調査研究についての内容を寄稿した。

#### カ 学び合い、学び続ける組織としての文化の醸成

- ・ 今回、共通のテーマを掲げ担当内での情報交換、情報共有、連携等を密にし、本調査研究の内容に留まらない幅広い知見を得た。
- ・ 第1回研究協力委員会におけるお茶の水女子大学教授耳塚寛明氏による基調講演。
- ・ 担当会議ごとに本調査研究に関する情報交換・情報共有の機会を創出。新学習指導要領や高大接続改革、児童生徒の学習評価に関する文書等について深く学ぶ機会や、各教科における「主体的・対話的で深い学び」についての報告会を実施、各教科部会の進捗を報告し合う場を設定し、互いに学びを深めた。
- ・ 指導主事4名が教育テスト研究センター（CRET）を訪問し、学習指導要領改訂や高大接続改革をはじめとする近年の教育改革についての実情を学び報告。
- ・ 外部講師や担当内の指導主事を講師とした担当内研修会を4回実施。

### (2) 課題

- ・ 本年度は、校種や教科等を越えて情報交換・情報共有、連携する機会をこれまで以上に設定し、各教科部会が切磋琢磨しながら本調査研究を進めてきたことで、校種や教科等の特質からそれぞれの教科部会の研究進度に差が生じていること。
- ・ 進度の差を踏まえた上で、先行する教科部会はより先進的に研究を進め、新たな成果や課題を発見し、それらを他の教科部会へ発信していくこと。
- ・ 先行する教科部会の知見を十分に生かしながら、より効果的に「目標、内容、指導、評価」の一体化を実践できるよう努めていくこと。

## 7 おわりに

本調査研究は、児童生徒の資質・能力の育成を目指し、全国に先駆けて「目標、内容、指導、評価」の一体化を目指した教育実践を行うものである。次年度は、国や県の動向を踏まえ、先行事例やこれまでの調査研究の成果や知見を生かしながら発展、展開したものを報告したい。

研究報告書は、埼玉県立総合教育センターのホームページ  
(<http://www.center.spec.ed.jp/>)から閲覧できます。